

〔大安寺伽藍縁起并流記資財帳〕合屏風壹拾玖牒佛物一牒、温室分、牒、通物九牒。〔類聚名物考調度四〕屏風一隻。

屏風一隻はかた／＼にて一雙にあらず、是をひとひらと云、ひらは枚を訓り、又一枚々々をも一ひらと云、六枚屏風ならばむひら也、連歌の句にも一ひらにとも、又はひら／＼にともいへるは一枚毎枚のことなり、源氏物語あづまの巻に、一ひらといふ詞あり。

〔故實雜々聞書〕一びやう風は一雙と常に申候、又立様の事、上座の次第にかさなり候歟。

〔法成寺攝政記〕寛弘三年三月三日乙巳、參内、南殿奉仕御装束略、北障子邊立五尺二階子略、其東立四尺畫屏風一雙、南北妻。

〔伊勢家集〕故中宮の春宮の女御とまだ聞えし時、題給はせて歌よませ給ひし御屏風の和歌、梅の花のたよりに、物いひたる人とおもはせて、ゑに男の行あひて、物いひはじめたるを、一のひらにか、せ給へるおとこ略、歌。

〔源氏物語五十東屋〕さうじのあなたに一尺ばかりひきさげて、屏風たてたり、そのつまに木丁すにそへてたてたり、かたびらひとへをうちかけて、玄をん色の花やかなるに、をみなへしのをりものとみゆる、かさなりて袖ぐちさしいでたり、屏風のひとひらた、まれたるより、心にもあらでみゆるなめり。

〔河海抄十二梅枝〕身づからひとよろひはかくべし、一雙、草子二帖也、屏風の一よろひも二枚也。

〔住吉物語〕かみびやうぶに、やまとゑかきたる一よろひたて、もやのみすにくちきがたのきやうかたびらかけて、いとあるべかしく、玄つらひたり。

〔類聚國史百八十三佛道〕弘仁三年二月壬辰、屏風一障子四十六枚、施入東寺。